

- ① 秋の田の かりほの庵の 苦をあらみ わが衣手は 露にぬれつつ
- ② 春過ぎて 夏来にけらし 白妙の 衣ほすてふ 天の香具山
- ③ あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の 長ながし夜を ひとりかも寝む
- ④ 田子の浦に うち出でてみれば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ
- ⑤ 奥山に 紅葉踏みわけ 鳴く鹿の 声きく時ぞ 秋は悲しき
- ⑥ かささぎの 渡せる橋に おく霜の 白きを見れば 夜ぞふけにける
- ⑦ 天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも
- ⑧ わが庵は 都のたつみ しかぞ住む 世をうぢ山と 人はいふなり
- ⑨ 花の色は うつりにけりな いたづらに わが身世にふる ながめせしまに
- ⑩ これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも 逢坂の関
- ⑪ わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと 人には告げよ 海人の釣舟
- ⑫ 天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ をとめの姿 しばしとどめむ
- ⑬ 筑波嶺の 峰より落つる 男女の川 恋ぞつもりて 淵となりぬる
- ⑭ 陸奥の しのぶもぢずり 誰ゆゑに 乱れそめにし われならなくに
- ⑮ 君がため 春の野に出でて 若菜つむ わが衣手に 雪は降りつつ
- ⑯ 立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる まつとし聞かば 今帰り来む
- ⑰ ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは
- ⑱ 住の江の 岸による波 よるさへや 夢の通ひ路 人目よくらむ
- ⑲ 難波潟 短きあしの ふしの間も 逢はでこの世を 過ぐしてよとや
- ⑳ わびぬれば 今はた同じ 難波なる みをつくしても 逢はむとぞ思ふ
- ㉑ 今来むと 言ひしばかりに 長月の 有明の月を 待ち出でつるかな
- ㉒ 吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を 嵐と言ふらむ
- ㉓ 月見れば ちぢにものこそ 悲しけれ わが身ひとつの 秋にはあらねど
- ㉔ このたびは 幣も取りあへず 手向山 紅葉の錦 神のまにまに
- ㉕ 名にし負はば 逢坂山の さねかつら 人に知られて くるよしもがな

- ②⑥ 小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば 今ひとたびの みゆき待たなむ
- ②⑦ みかの原 わきて流るる 泉川 いつ見きとてか 恋しかるらむ
- ②⑧ 山里は 冬ぞ寂しさ まさりける 人目も草も かれぬと思へば
- ②⑨ 心あてに 折らばや折らむ 初霜の 置きまどはせる 白菊の花
- ③⑩ 有明の つれなく見えし 別れより 暁ばかり 憂きものはなし
- ③① 朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに 吉野の里に 降れる白雪
- ③② 山川に 風のかけたる しがらみは 流れもあへぬ 紅葉なりけり
- ③③ ひさかたの 光のどけき 春の日に 静ず心なく 花の散るらむ
- ③④ 誰をかも 知る人にせむ 高砂の 松も昔の 友ならなくに
- ③⑤ 人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香ににほひける
- ③⑥ 夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿るらむ
- ③⑦ 白露に 風の吹きしく 秋の野は つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける
- ③⑧ 忘らるる 身をば思はず 誓ひてし 人の命の 惜しくもあるかな
- ③⑨ 浅茅生の 小野の篠原 忍ぶれど あまりてなどか 人の恋しき
- ④⑩ 忍ぶれど 色に出でにけり わが恋は ものや思ふと 人の問ふまで
- ④① 恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり 人知れずこそ 思ひそめしか
- ④② 契りきな かたみに袖を しぼりつつ 末の松山 波越さじとは
- ④③ 逢ひ見ての 後の心に くらぶれば 昔はものを 思はざりけり
- ④④ 逢ふことの 絶えてしなくは なかなかに 人をも身をも 恨みざらまし
- ④⑤ あはれとも いふべき人は 思ほえて 身のいたづらに なりぬべきかな
- ④⑥ 由良のとを 渡る舟人 かぢを絶え 行く方も知らぬ 恋の道かな
- ④⑦ 八重むぐら 茂れる宿の 寂しきに 人こそ見えね 秋は来にけり
- ④⑧ 風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ くだけてものを 思ふころかな
- ④⑨ みかきもり 衛士のたく火の 夜は燃え 昼は消えつつ ものをこそ思へ
- ⑤⑩ 君がため 惜しからざりし 命さへ 長くもがなと 思ひけるかな

- ⑤① かくとだに えやは伊吹の さしも草 さしも知らじな 燃ゆる思ひを
- ⑤② 明けぬれば 暮るるものとは 知りながら なほ恨めしき 朝ぼらけかな
- ⑤③ 嘆ぎつつ ひとり寝る夜の 明くる間は いかにか久しき ものとかは知る
- ⑤④ 忘れじの 行く末までは かたければ 今日を限りの 命ともがな
- ⑤⑤ 滝の音は 絶えて久しく なりぬれど 名こそ流れて なほ聞こえけれ
- ⑤⑥ あらざらむ この世のほかの 思ひ出に 今ひとたびの 逢ふこともがな
- ⑤⑦ めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に 雲隠れにし 夜半の月かな
- ⑤⑧ 有馬山 猪名の笹原 風吹けば いでそよ人を 忘れやはする
- ⑤⑨ やすらはで 寝なましものを 小夜更けて かたぶくまでの 月を見しかな
- ⑥⑩ 大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみも見ず 天の橋立
- ⑥⑪ いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほひぬるかな
- ⑥⑫ 夜をこめて 鳥の空音は はかるとも よに逢坂の 関は許さじ
- ⑥⑬ 今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを 人づてならで 言ふよしもがな
- ⑥⑭ 朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに あらはれわたる 瀬々の網代木
- ⑥⑮ 恨みわび ほさぬ袖だに あるものを 恋に朽ちなむ 名こそ惜しけれ
- ⑥⑯ もろともに あはれと思へ 山桜 花よりほかに 知る人もなし
- ⑥⑰ 春の夜の 夢ばかりなる 手枕に かひなく立たむ 名こそ惜しけれ
- ⑥⑱ 心にも あらで憂き世に ながらへば 恋しかるべき 夜半の月かな
- ⑥⑲ 嵐吹く 三室の山の もみぢ葉は 竜田の川の 錦なりけり
- ⑦⑰ 寂しさに 宿を立ち出でて ながむれば いづこも同じ 秋の夕暮れ
- ⑦⑱ タされば 門田の稲葉 おとづれて 蘆のまるやに 秋風ぞ吹く
- ⑦⑲ 音に聞く 高師の浜の あだ波は かけじや袖の ぬれもこそすれ
- ⑦⑳ 高砂の 尾の上の桜 咲きにけり 外山の霞 立たずもあらなむ
- ⑦㉑ 憂かりける 人を初瀬の 山おろしよ 激しかれとは 祈らぬものを
- ⑦㉒ 契りおきし させもが露を 命にて あはれ今年の 秋もいぬめり

- 76 わたの原 漕ぎ出でて見れば ひさかたの 雲居にまがふ 沖つ白波
- 77 瀬を早み 岩にせかるる 滝川の われても末に 逢はむとぞ思ふ
- 78 淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に 幾夜寝覚めぬ 須磨の関守
- 79 秋風に たなびく雲の 絶え間より もれ出づる月の 影のさやけさ
- 80 長からむ 心も知らず 黒髪の 乱れて今朝は ものをこそ思へ
- 81 ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば ただ有明の 月ぞ残れる
- 82 思ひわび さても命は あるものを 憂きに堪へぬは 涙なりけり
- 83 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる
- 84 長らへば またこのごろや しのばれむ 憂しと見し世ぞ 今は恋しき
- 85 夜もすがら 物思ふころは 明けやらぬ 閨のひまさへ つれなかりけり
- 86 嘆けとて 月やは物を 思はする かこち顔なる わが涙かな
- 87 村雨の 露もまだひぬ 槇の葉に 霧立ちのぼる 秋の夕暮れ
- 88 難波江の 蘆のかりねの ひとよゆゑ みをつくしてや 恋ひわたるべき
- 89 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの 弱りもぞする
- 90 見せばやな 雄島のあまの 袖だにも 濡れにぞ濡れし 色はかはらず
- 91 きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしるに 衣片敷き ひとりかも寝む
- 92 わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね 乾く間もなし
- 93 世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ 海人の小舟の 綱手かなしも
- 94 み吉野の 山の秋風 小夜ふけて ふるさと寒く 衣打つなり
- 95 おほけなく 憂き世の民に おほふかな わが立つ袖に 墨染めの袖
- 96 花さそふ 嵐の庭の 雪ならで ぶりゆくものは わが身なりけり
- 97 来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに 焼くや藻塩の 身もこがれつつ
- 98 風そよぐ ならの小川の 夕暮れは みそぎぞ夏の しるしなりける
- 99 人もをし 人も恨めし あぢきなく 世を思ふゆゑに もの思ふ身は
- 100 ももしきや 古き軒端の しのぶにも なほあまりある 昔なりけり